岡大医短紀要，4：11～17，1993
Bull. Sch. Health Sci. Okayama Univ.

助産婦養成課程受験者の実態

白井喜代子・合田典子

The State of the Applicants to Our Midwife Training

Kiyoko SHIRAI, Noriko GODA

Nursing students taking the entrance examination for our midwifery training program in the academic year 1992-1993 were evaluated with regard to what motivated them to apply to our program and their plans after graduation. The results were as follows:
1. The wish of the nursing students themselves was the decisive factor in their decision to apply.
2. Our investigation revealed that 10% of the nursing students decided to take up midwifery after graduation from nursing school; 25% decided to do so before their entrance to nursing school: and 65 % made up their minds while they were still at nursing school.
3. The applicants planned to work as professional midwives for a long time after their completion of the midwifery training program.
4. Junior college graduates, after receiving authorization from the National Institution of Academic Degrees, were motivated to apply to our midwifery training program for the explicit purpose of acquiring a bachelor's degree.

Key Words：助産婦課程受験者・進学動機・進路希望

はじめに

助産婦養成課程は，看護基礎教育を基盤として助産学及び関連諸科学を教育する，履習年限一年の専門教育課程である。全国の助産婦養成施設数は1992年4月現在84ヶ所であり，年間養成者数も1700人程である[1]。

従って，就業助産婦数は看護職（助産婦，看護婦，保健婦）の全体割合でみると少なく，1990年現在3％にしかすぎない[1]。又，高齢者が多い為，今後助産婦数は漸減していくと考えられている。

他方，保健医療をめぐる環境が変化して，高度化，専門化，国民の健康に対する関心の深さが指摘されている[2]。その為，専門職にふさわしい助産婦業務を遂行する為には，後継者の人数確保と共に，資質の確保も心要となってくる。

この度，本校は学位授与機構の求める要件を満たす専攻科として認定された。認定前後で，学生の本校選択理由や今後の進路等に違いがあるかを知り，学生確保の方法を考える一助とする目的で調査を行なった。

対象と方法

専攻科助産学特別専攻の1992年度受験生60人と，1993年度受験生106人を対象とした。1992年2月と，1993年2月の入学試験時に，アンケート調査を実施した。

岡山大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻

結　　果

1．受験生の背景

1）養成形態別割合

看護専門学歴を養成形態別に比較した。看護大学出身者は，1992年度はいなかった。1993年度の看護大学出身者の割合は，1.9%であった。

看護短期大学出身者の割合は，1992年度36.7%で第2位であったが，1993年度は48.1%となり第1位であった。

一方，看護婦学校養成所（3年）出身者の割合は，1992年度43.3%で第1位であったが，1993年度は30.2%となり第2位であった。

看護婦学校養成所（2年）出身者の割合に変化はなかった。

表1　養成形態別割合

養成形態＼年度	1992	1993
看護大学　（4年）	0（ 0 ）	2（ 1.9）
看護短期大学　（3年）	22（ 36.7）	51（ 48.1）
看護婦学校養成所（3年 定時制4年）	26（ 43.3）	32（ 30.2）
看護婦学校養成所（2年 定時制3年）	12（ 20.0）	21（ 19.8）
合計人数（%）	60（100.0）	106（100.0）

2）養成形態別現役割合

看護コース在学中に受験した現役受験者割合は，1992年度68.3%，1993年度81.1%であった。1993年度の現役受験者割合の増加は，看護短期大学と看護婦学校養成所（2年）の現役率の増加による。

表2　養成形態別現役割合

養成形態＼年度	1992	1993
看護大学　（4年）	——	100.0
看護短期大学　（3年）	72.7	90.2
看護婦学校養成所（3年 定時制4年）	73.1	71.9
看護婦学校養成所（2年 定時制3年）	50.0	71.4

単位は%

3）受験時の年齢

受験時の平均年齢は，1992年度22.2歳，1993年度22.1歳であった。受験時年齢は，4年制の看護大学を除くと，看護短期大学，看護婦学校養成所（3年），看護婦学校養成所（2年）の順に高くなった。

既婚者は，1992年度はいなかった。1993年度は2.8%であった。

表3　受験時年齢

養成形態＼年度	1992	1993
看護大学　（4年）	——	22.0±0
看護短期大学　（3年）	21.6±1.1	21.4±0.9
看護婦学校養成所（3年 定時制4年）	22.4±2.5	22.1±2.4
看護婦学校養成所（2年 定時制3年）	22.9±2.1	24.3±5.0

単位は歳

4）出身地

出身地別割合をみると，第1位中国地方，第2位四国地方であり，これら2地区で70%を占めた。1993年度も西日本中心であるが，中部・関東地方出身者もおり，範囲が広がった。

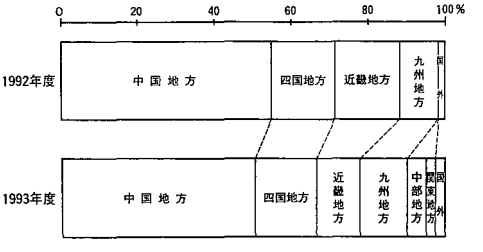

図1　出身地別割合

表4　出身県別割合

	1992年度		1993年度	
順位	県名	%	県名	%
1	※岡山	31.7	岡山	18.0
2	広島	16.7	広島	13.2
3	兵庫	13.3	山口	11.3
4	香川	8.3	香川	8.5
5	山口	5.0	兵庫	7.5
6	愛媛	5.0	愛媛	6.6

※P＜0.05

受験者の出身県を上位6位まで挙げた。1992年度の第1位は岡山，第2位広島，第3位兵庫，第4位香川，第5位山口，第6位愛媛であった。1993年度の第6位までの県は，1992年度と同一県であったが，第3位と第5位の順位の入れ変えがあった。1993年度受験生の岡山出身者の割合が減少したが，岡山を中心とした瀬戸内海沿いの近隣県出身者が多かった。

2．看護コース選択時影響力のあった要因

看護コースに進む時，コース選択に影響力のあった人や事柄について調べた。

7項目の尺度は，1強，2中，3弱，4影響なしとした。1992年度及び1993年度受験生の平均値プロフィールは，同じような傾向を示した。

「自分自身の希望」が最も強く，次に「家族のすすめ」だった。「学校の先生のすすめ」「親戚の人のすすめ」「その他の人のすすめ」の影響力は，受験生自身は弱いと感じていた。

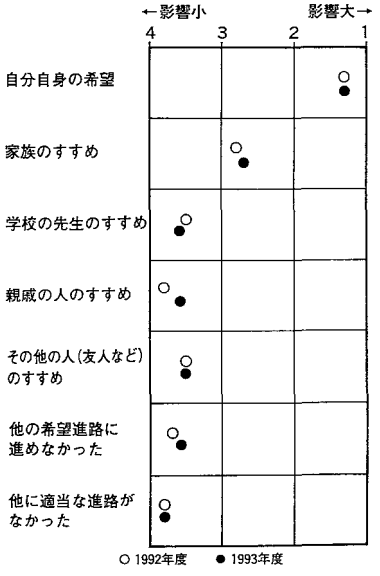

図2　看護コース選択時影響力のあった要因

家族や親戚に医療従事者がいると答えた者は約60%いた。又，その職種も，助産婦，看護婦，保健婦，医師，放射線技師，臨床検査技師，薬剤師，事務など19種類にも及んだ。しかし，家族に医療職がいる者は少なく，1992年度15%，1993年度22.6%であった。看護コース選択時，家族の中で最も影響力があったのは母親だったが，母親が医療職という者は，1992年度11.7%，1993年度14.2%であった。二番目に影響力のあった父親は，両年共に医療職に従事する者はなかった。

「他の希望進路に進めなかった」「他に適当な進路がなかった」という，ネガティブセレクションは低かった。看護コース選択時，看護への道が第一希望だった者は，1992年度53人(88.3%)，1993年度87人（82.1%）だった。その他の者は，看護以外の大学や短大への進学を希望していた。

3．助産婦コース選択時影響力のあった要因

助産婦コースに進む時，コース選択に影響力のあった人や事柄について調べた。

7項目の尺度は，1強，2中，3弱，4影響なしとした。「自分自身の希望」が最も強かった。次に，1992年度は「家族のすすめ」であり，1993年度は「学校の先生のすすめ」であった。人の影響力の中では「親戚の人のすすめ」が一番弱かった。

又，「受験雑誌」や「公開説明会」の影響力も弱かった。

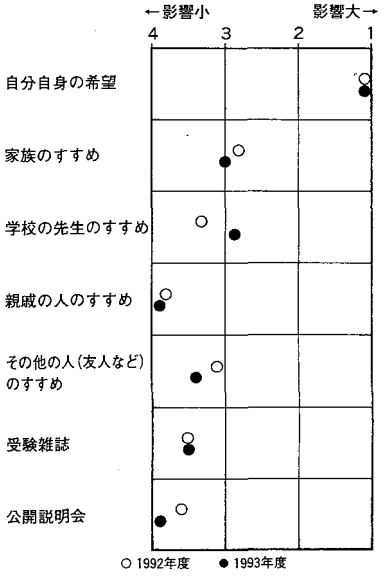

図3　助産婦コース選択時影響力のあった要因

4．助産婦志向時期

受験生が助産婦を志向した時期は，看護コース入学前25%，看護コース在学中65%，看護コース卒業後10%で，1992年度と1993年度で大差なかった。

助産婦を志向した動機を自由記載からみた。看護コース入学前に志向した者は，TV番組，本，看護資格取得目的，看護職への興味，自分や兄弟の出生のエピソード，自分を取り上げた助産婦との出会いを契機に挙げていた。

看護コース在学中に志向した者の大半は，実習が契機になっていた。分娩見学や症例受け持ち，助産婦の働く姿に影響されたと答えていた。二番目は講義であり，他には，本，姉の出産，職場やアルバイト先が産科，海外協力隊を挙げていた。

看護コース卒業後に志向した者の大半は，配属場所が産科の為，学習を目的に挙げていた。

表5　助産婦になろうと思った時期

時期＼年度	1992	1993
小学校時代	2（ 3.3）	1（ 0.9）
中学校時代	3（ 5.0）	2（ 1.9）
高校時代	9（15.0）	25（23.6）
看護コース在学中	39（65.0）	65（61.3）
看護コース卒業後	7（11.7）	11（10.4）
いつとは言えない	0（ 0 ）	2（ 1.9）
合計人数（%）	60（100.0）	106（100.0）

5．本校の選択理由

まず，受験生は，本校を選ぶ時，「医療短大の専攻科である」「併設の実習病院がある」「国立である」ということを利点として挙げていた。教育基盤や指導態勢が整っていることを，大切な要素として考えていた。

次には，「親元から近い」「家から通える」という，家族からの距離に関することを挙げていた。受験者が，交通の便の良い瀬戸内海沿岸の近隣県出身者が多いことからもうかがえる。

金銭的な事は，あまり関係しないようであるが，その中では「授業料が安い」を利点として挙げた者が20%いた。

1992年度と1993年度で差のあった項目は，「施設・設備が新しい」と「その他」であった。「施設・設備が新しい」と答えた者は，1992年度51.7%で，1993年度32.1%であった。1992年度は，1993年度と比較すると，岡山県出身者の割合が多く，他県出身者で岡山県の看護コース在学中の者も多かった。又，公開説明会受講者割合も高かった。これらより，施設や設備を見学したり情報を得る機会が多かったのではないかと考える。

「その他」と答えた者は，1992年度6人（10%）で，1993年度28人（26.4%）であった。自由記載の内容を検討した。1993年度の20人は，本校の利点を「学位授与機構認定校である。」と，明記していた。20人は全員看護短期大学出身者であり，これは，1993年度看護短期大学出身受験者の40%に相応した。他の内容については，両年共，本校の利点として挙げた11項目に近いものであった。

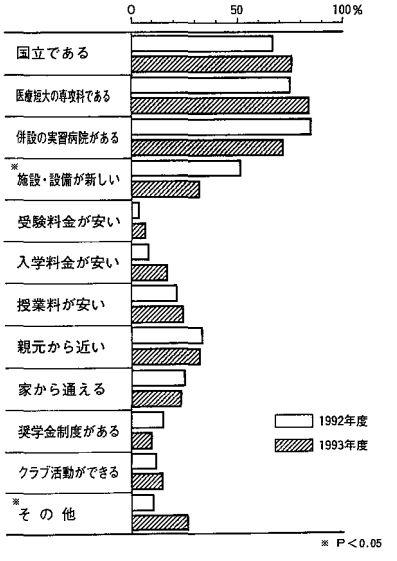

図4　本校の利点

6．受験願書提出校

一人あたりの平均受験校数は，1992年度2.9校，1993年度2.6校であった。

受験生の願書提出先を養成施設別に分けた。1992年度の第1位は助産婦学校で，第2位は短期大学専攻科（助産婦コース）であった。1993年度

の第１位は短期大学専攻科（助産婦コース）で，第２位は助産婦学校であった。1992年度と1993年度では順位が逆転した。又，1993年度は，1992年度と比較すると，短期大学専攻科(助産婦コース)を受験する者が増加し，助産婦学校を受験する者は減少した。

又，保健婦学校を受験する学生は，1993年度増加した。

表６　受験願書提出校内訳

種別＼年度	1992	1993
※助産婦学校	91 (52.3)	65 (23.3)
※短期大学専攻科	79 (45.4)	182 (65.2)
※保健婦学校	1 (0.6)	13 (4.7)
保健婦・助産婦合同コース	3 (1.7)	12 (4.3)
養護教員養成所	0 (0)	4 (1.4)
その他(編入学)	0 (0)	3 (1.1)
合計数（%）	174 (100.0)	279 (100.0)

※P＜0.05

７．職種別にみた受験願書提出先

願書の提出先を職種の組み合わせで検討した。1992年度は，助産婦のみの希望者が93.3%で多かった。助産婦と保健婦を希望した6.7%の者も，保健婦・助産婦合同コースを選んでいた。

1993年度は，助産婦職のみの希望者は80.2%で，1992年度と比較し減少した。助産婦と保健婦を希望した者は15.1%であった。割合的には少ないが，助産婦と養護教員を希望した者0.9%，助産婦と保健婦と養護教員を希望した者1.9%，そして助産婦と編入学希望者1.9%であった。

表７　職種別にみた受験願書提出先

志望職種内訳＼年度	1992	1993
※助産婦のみ	56 (93.3)	85 (80.2)
助産婦と保健婦	4 (6.7)	16 (15.1)
助産婦と養護教員	0 (0)	1 (0.9)
助産婦と保健婦と養護教員	0 (0)	2 (1.9)
助産婦と編入学他	0 (0)	2 (1.9)
合計人数（%）	60 (100.0)	106 (100.0)

※P＜0.05

８．助産婦のイメージ

受験生が助産婦に対してどのようなイメージを持っているかを調べた。

各項目の尺度は，１まったく当てはまらない，２ほとんど当てはまらない，３やや当てはまる，４かなり当てはまる，５非常に当てはまるとした。

1992年度と1993年度の各項目の平均値は近似していた。「判断力のある」「責任感のある」「知識の豊富な」という，仕事の知性に関する得点が高く上位を占めていた。そして，次には「体力のある」「大変な」「多忙な」「健康的な」「身体の丈夫な」という仕事の体力に関する得点が高かった。「優しい」「笑顔の」という親知性に関する項目が続き，「美しい」「かわいい」「恐ろしい」「意地悪な」「冷たい」という外見性に関する項目となった。

表８　助産婦のイメージ

項目＼点数	1992年度	1993年度
判断力のある	4.7	4.8
責任感のある	4.7	4.7
知識の豊富な	4.6	4.5
体力のある	4.4	4.5
大変な	4.3	4.2
素敵な	4.3	4.2
多忙な	4.2	4.1
優しい	4.2	4.1
気が利く	4.1	4.2
健康的な	4.1	4.2
身体の丈夫な	4.1	4.1
笑顔の	4.1	4.1
頭が良い	4.0	3.8
しんどい	3.9	3.7
気が強い	3.4	3.5
美しい	3.3	2.8
かわいい	2.1	2.1
恐ろしい	2.0	1.7
意地悪な	1.7	1.6
冷たい	1.6	1.5

９．職場選択

将来看護職に就く時，受験生はどのような条件や機会を大切に考えているかを調べた。

各項目の尺度は，１ほとんど必要ない，２あまり必要ない，３やや必要，４かなり必要，５非常に必要とした。

1992年度と1993年度の各項目の平均値は近似していた。職場環境の中でも，特に人間関係を重要視していた。そして，次には社会的貢献度に関す

ることや，自己実現を挙げていた。金銭獲得については，平均値では3.7～3.9あり，かなり必要としているが順位としては低かった。

表9　就業時大切と考えられること

項目＼点数	1992年度	1993年度
仕事仲間との良き人間関係	4.8	4.8
職場の皆から受け入れられること	4.7	4.7
上司との良き人間関係	4.5	4.6
仕事を通じて社会に役立つこと	4.5	4.4
安定した勤め先であること	4.5	4.4
自分の力で何事かを成し遂げる機会	4.3	4.3
仕事の上での自己の将来性	4.2	4.2
自分の能力がためされる機会	4.0	4.1
通勤の便利さ	4.0	4.1
高い給与・ボーナス	3.9	3.7
困難な仕事へ挑戦する機会	3.7	3.7
休日が多いこと	3.6	3.5
勤務時間が短いこと	3.1	3.2

10. 卒業後の進路

助産婦として勤務したいという者が大半であった。看護婦として勤務したいと答えた者も，臨床経験を積むという前向きな内容であった。その他と答えた者は，海外協力隊への参加や地域での母子保健活動を挙げていた。

又，希望進路に進んだ後は，出産を機に退職する者5.4%，子育て期間のみ休業する者47.3%，子育て等に関係なく定年まで仕事を継続する者47.6%であった。

表10　卒業後の希望進路

内容＼年度	1992 (n=60)	1993 (n=106)
助産婦として勤める	60 (100.0)	103 (97.2)
看護婦として勤める	3 (5.0)	4 (3.8)
ゆくゆくは開業したい	4 (6.7)	4 (3.8)
看護婦コースの専任教員	4 (6.7)	2 (1.9)
助産婦コースの専任教員	3 (5.0)	3 (2.8)
看護に関係ある学校へ進学	1 (1.7)	7 (6.6)
そ の 他	3 (5.0)	8 (7.5)

多重回答　単位人（%）

考　　察

本学受験生が，助産婦職を志向した時期は，看護コース入学前25%，看護コース在学中65%，看護コース卒業後10%であった。

看護コース入学前の時期では，高校時代に助産婦を志望した受験者が最も多かった。そして，大学進学を前にした進路決定の時期に決めていた。助産婦職の60%が病院，20%が助産所に勤務[1]している現状では，看護コース入学前に助産婦を志望した者の契機となった事柄は，助産婦との直接的な出会いよりも，マス・メディア関連の方が多かった。

看護コース在学中に助産婦を志望した者が最も多く，中でも母性の臨床実習がきっかけになっていた。講義で母性看護に興味を持った後，分娩，保健指導，妊産褥婦・新生児看護などの助産婦業務を目のあたりにし，助産婦に対する認識が養われたと考える。看護コース卒業後の受験生の配属場所が産科であった事も含め，実践場面を体験することの影響力は大きい。

さらに，職業体験は，助産婦イメージや職場選択の動機でも，現実直視型の反応を示させていると言える。助産婦イメージでは，仕事に必要な知力，体力に関する項目の点数が高く，就業時の重要な要素には，人間関係の円満さを挙げていた。

卒業後の進路でも，多くは助産婦として就業したいと考えており，職業継続後の具体的な目標が明らかな学生もいた。

職業の継続に関しては，子育て期間のみ休業という再就職型は47.3%で，子供を持っても働く両立型が47.6%であった。青年期女性一般と比較すると，専業主婦志向は低く，両立型は2倍近くの高率を示した[3]。受験生の95%が，出産後も仕事を続けたいと答えている。調査対象の大多数が未婚で，結婚，出産，育児という未知の事を想定しての希望としては，職業継続の意志が強い集団と推測される。

看護職の高学歴化は，看護界の望みでもあり，社会も支援している。しかし，1992年4月現在の，看護コース年間養成者割合[4]をみると，看護大学出身者は1.6%しかなく，数はまだ少ない。看護短

期大学出身者は10.4%であり，看護婦学校養成所出身者（3年）が46.5%，看護婦学校養成所出身者（2年）が41.5%という実状である。

本学が，学位授与機構の求める要件を満たす専攻科として認定されたのは，1992年度入試の後である。学位授与制度の改正前後という観点で，1992年度と1993年度を比較した。1993年度には，学位授与制度の改正が影響したと考えられる事がいくつかあった。まず，受験者数が増加した。次に，看護短期大学出身者の受験者割合も増加傾向となった。そして，看護短期大学出身受験者の40%の者が，本校の選択理由に，学位授与機構認定校であり学士の取得に適していると答えていた。又，看護コース，助産婦コース選択時，共に進路決定には自分の意志が最優先していたが，1993年度受験生は，影響のあった要因の二番目に，教師のすすめを挙げていた。他には，受験願書提出校が，助産婦学校は減少し，短期大学専攻科（助産婦コース）は増加した。助産婦職のみを希望して受験する者の割合は減少した。

一方，看護コース終了後の進学や編入学希望者は，大学受験失敗者が多いという長浦ら[5]の調査結果とは異なり，看護への道が第1希望だったとする者が多かった。進学は学歴取得にとどまらず，過去の学習や臨床体験をとうして，更なる勉学の必要性に受験生自身が気づいた為ではないかと考える。

学生確保の為のPR活動として，公開説明会を実施しているが，助産婦課程への参加者は少ない。受験生は岡山を中心とした瀬戸内海沿いの近隣県出身者が多いが，範囲は広がる傾向にある。その為，本学を訪問してもらう形式だけでは，距離の問題もあり，参加数の増加は見込みにくい。又，看護コース在学中の助産婦志向者割合が高かったが，母性実習で助産婦職の認識も養われていると推測される為，学科紹介の内容や方法を考え直す必要があると思われる。

ま　と　め

1992年度と1993年度に本学専攻科助産学特別専攻を受験した者を対象に，進学動機や卒業後の進路希望の実態調査を行なった。

1．進路決定時，最も影響力が強かったのは，自分自身の希望であった。
2．助産婦志向の時期は，看護コース入学前25%，看護コース在学中65%，看護コース卒業後10%であった。契機となった事には，看護コース入学前はマス・メディアの影響を，看護コース在学中は母性実習を，看護コース卒業後は配属場所が産科だったことを挙げていた。
3．卒業後は助産婦職に就き，長期間仕事を継続したいと考えていた。
4．学位授与機構認定後の看護短期大学出身受験者は，学士の取得を本校の入学理由に挙げていた。

文　　献

1）厚生省健康政策局看護課監修：平成4年看護関係統計資料集．日本看護協会出版会，東京．1992.
2）野村紀子：今から，何を，どう変えるのか―21世紀の助産婦像を構築するために―．助産婦雑誌42：274-279，1988.
3）田辺恵子：看護婦及び看護学生の職業観と男女役割観に関する意識調査．母性衛生33：81-85，1992.
4）日本看護協会編：平成5年版看護白書．日本看護協会出版会，東京．
5）長浦レイ子，村上生美，原萃子：全国国立大学医療技術短期大学部看護学科3年生の進路希望の実態．看護教育23：238-244，1982.
6）日本看護協会研究室編：1992年看護学生の進路選択に関する調査．日本看護協会出版会，東京．
7）安田貴恵子，田中久恵，村山正子，奥山則子：保健婦養成課程進学者の背景―当短大専攻科地域看護学専攻入学生に対するアンケート調査から―．東京都立医療技術短期大学紀要3：99-104，1990.
8）上大迫敏子，石原俊一，中島美代子，増野葉子，宮脇美保子，渡邊典子，藤原明子：看護職イメージに関する研究(1)―看護学生における看護職イメージについて―．第24回日本看護学会集録（看護教育）：178-180，1993.
9）荒川靖子，小野ツルコ，小原ルリ子，伊東久恵，喜多嶋康一：短大看護学科への進路決定に影響する要因の研究．岡山大学医療技術短期大学部紀要2：97-104，1991.
10）河野祐子，片桐麻州美：看護大学編入学生の学習ニードの内容とその充足の自己評価．第24回日本看護学会集録（看護教育）：116-118，1993.
11）鳥山みどり，鈴村初子，小笠原昭彦：本校学生の進路選択に関する実態調査―職業観・欲求傾向との関係―．名古屋市立大学看護短期大学部紀要5：31-42，1993.